

## 麦 作

## 令和元年度小麦作柄調査の概要について

北海道立総合研究機構北見農業試験場 主査(育種) 大西 志 全

令和元年7月2日～4日の3日間の日程で小麦作柄現地調査を行った。参加者は北海道農政部、農研機構北海道農業研究センター、道総研農業研究本部、北海道農政事務所、北海道NOSAI、ホクレン農業協同組合連合会、北海道農産物集荷協同組合、北海道米麦改良協会の関係機関からのべ38人であった。各現地では、JA、農業改良普及センター、生産者から地域の作柄と当該圃場の小麦の生育状況を説明していただいた。

調査箇所はオホーツク管内で調製施設1箇所と圃場3箇所、十勝管内2箇所、上川管内1箇所、空知管内2箇所の合計9箇所、大空町川井氏、美幌町平岡氏、寺崎氏、音更町馬淵氏、芽室町松永氏、美瑛町佐藤氏、岩見沢市栗沢の大槻氏、岩見沢市北村試験圃で調査を行った。調査終了後、岩見沢市の空知農業会館で検討会を行い、本年度の小麦生育の現況についてとりまとめた。

秋まき小麦の生育経過については、秋の播種作業が順調で播種後の気温が高かったことから、生育が進み、越冬前の茎数がかなり多く、冬損が少なかったこともあり起生期の茎数はかなり多かった。しかし、普及センターによる追肥時期を遅らせる指導や春先の干ば

つにより穂数の極端な増加は抑えられており、倒伏の発生は限定的になると見込まれた。

十勝では本年は積雪が極端に少なく、凍害により地上部が枯死した圃場がかなり多かったが、地下部は生存しており、気温の上昇とともに急激に回復し凍害の影響は皆無であった。一方、越冬前の気温が高く、ウイルス感染に適した条件が整ったこと、起生期以降しばらく低温が続き病徴の発現が助長されたことから、道東では「きたほなみ」において縮萎縮病の発生が非常に多く、その後の回復はみられるものの、収量への影響が心配された。

秋まき、春まきともに播種以降の日照と気温に恵まれ、1週間前後生育が早く進んでいる。干ばつの影響は心配されるが、昨年と比較すると開花以降の気温と日照に恵まれており、不稔や赤かび病の発生の心配はないと考えられる。高温と乾燥により上川・道央では赤さび病の発生が多くその影響も懸念されるが、概ね順調に生育しており今後の天候次第では良い作柄が期待される。

最初の調査地の大空町の川井氏の「きたほなみ」の圃場では、当初茎数は多かったものの、起生期の追肥の省略や干ばつの影響により現在の穂数はかなり平年に近づいており、稈長が短いこともあって倒伏の心配はなかった。川井氏は採種栽培もされておられるが、同じ川井氏の圃場でも採種圃では播種量を減らしているため製品歩留が高いことなど興味深いお話をお聞きできた。

大空町では引き続き新設された乾燥調製施設のビーンズファクトリーを見学した。豆だけではなく、女満別の小麦の受け入れと調製も担っており、施設の受け入れ能力の向上により小麦受け入れ時の生産者の待ち時間が大



調査風景

幅に改善されたこと、受け入れにより生じた粉塵などは堆肥にはせず産業廃棄物として処理することで病害の拡大を防いでいることなど説明を受けた。

美幌町では平岡氏の圃場を視察したが、今年の春まき小麦の生育は早く進んでいるが、干ばつによる圃場内の生育ムラが大きいとのことであった。同じく美幌町の寺崎氏の「きたほなみ」の圃場では、被覆窒素による緩行性肥料をやめて、圃場の様子を観察しながらの硫安によるきめ細かな追肥へ変更を検討されている圃場を見せていただいた。今年の小麦の特徴として、ニバーレによる葉枯れ症状などがなく、止葉がきれいであることを挙げられ、今年の作柄には期待しているとのことであった。

2日目の音更町では、馬淵氏の圃場を視察した。地域では普及センターの熱心な指導により、「きたほなみ」の春先の追肥をできるだけ遅らせる栽培法が普及しており、穂数過多になりがちな本年の気象にも関わらず、馬淵氏の圃場では平年よりやや多い程度の穂数にコントロールされており倒伏の懸念はなかった。続いて芽室町の松永氏圃場では、「きたほなみ」で播種量を減らして起生期の追肥を行わない取り組みの実証圃場を見せていただいた。もともと地力が高い圃場である

こともあり、SPAD値から判断し、本年は、幼穂形成期の10日後に2kg追肥されたのみとのことであった。起生期の追肥を行わなかった部分の穂数はやや少ないものの、穂長は長く充実しており、製品歩留も含めた今後の結果が楽しみであった。播種には大型のドリルが使われているとのことであったが、非常に幅広のバルーンタイヤを装着されているのが印象に残った。

美瑛町では、「きたほなみ」と「ゆめちから」の圃場を見せていただいた。本年は「きたほなみ」で赤さび病の発生が止まらず苦勞されている生産者が多いとのことであった。土壤の物理性、保肥力が劣ることから、追肥をかなり多くされているとのことであったが、本年は一部の圃場では倒伏が見られるとのことであった。佐藤氏を含めた関係者の小麦に対する非常に熱い想いが感じられ、収量と品質の安定に向けて、美瑛町の土壤に最適な追肥時期と量が今後さらに検討されることを期待したい。

最後の岩見沢市では、大槻氏の「きたほなみ」の圃場を拝見した。茎数の多かった本年は、起生期の追肥を幼穂形成期まで遅らせたことで、現時点での倒伏はみられなかった。穂数がやや多めで混み合っていたことから、さらに追肥を遅らせばベストだったので



参加者全員（芽室町にて）

はないかとの論議で盛り上がった。本年の岩見沢市は日照が多く、大槻氏の圃場の粒の充実は良く、今後が楽しみである。最後に岩見沢市の北村試験圃を訪問し、西飯氏より試験内容の説明を受けた。岩見沢市では「キタノカオリ」で例年赤さび病の発生が多いことから、赤さび病の防除体系を北村の試験圃場で熱心に検討されており、試験内容について活発に質疑応答がなされた。

今回の調査では優良事例の生産者圃場を多く調査させていただいたが、共通していたのが小麦の生育を良く観察して追肥作業などをこまめに対応されていることであった。また、

「きたほなみ」では越冬前の莖数がかなり多かったこともあって、起生期の追肥を遅らせてコンパクトの草姿にして製品歩留を上げる栽培を実践されている生産者が多かった。

検討会では、多少の懸念点はあるものの、全体としては概ね順調であることが確認され、不作が2年続くことが避けられそうなことに一同安堵した。一方、これからの天候や、雨に遭遇する前に迅速に収穫することも重要である。ここまで良好に生育してきた小麦は、これまでの生産者と関係各位の精力的な取り組みの結果であり、その努力が報われるよう、収穫までの気象が良好に経過し本年の作柄が良好となることを祈念する。